みなと 今・むかし新聞

第13号
平成22年10月

江戸・名勝の地
「愛宕山」を訪ねる

愛宕山は、武蔵野台地の東端に位置します。標高28メートル。北方にあります「上野台地」は、標高26メートル。わずかに、愛宕山が高いのです。

この地は、江戸時代から庶民の行楽地として人気がありました。

「お伊勢七度、熊野に三度、芝の愛宕さんは月まいり」と人気の程が感じられます。



上の写真の階段は男坂。急斜面に八十六段の石段。登るのも大変。休み休み登らないと大変です。右側は女坂。階段数は百八段。

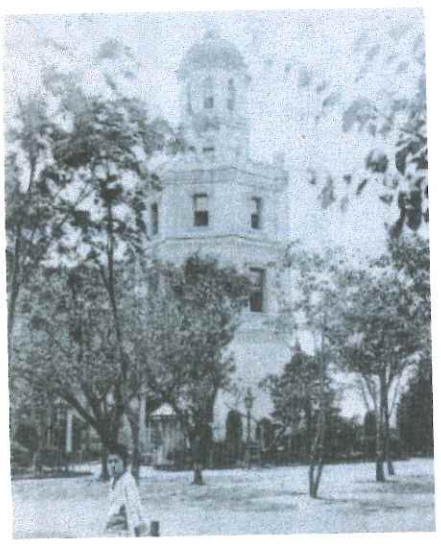
幕末のころに写された写真をみますと、愛宕山から江戸湾が見えました。青い空・青い海そして海上をゆったりと走る「白帆の船」。まさに、一幅の絵を見るようです。遠く房総半島や三浦半島が望めました。

明治の頃に、愛宕館と愛宕塔

明治二十二年十二月二十一日付けの「東京朝日新聞」に次のような広告が有りました。

「本館並高塔の建築租落成候に付　来る二十二日より仮開館致し　席室貸与高塔登覧等諸君の望みに応じ候此段広告す」とありました。

また、明治二十三年四月一日付けの東京朝日新聞には、愛宕塔の広告が掲載されてます。「愛宕塔は、東京第一の高塔にしてその高き事、海面より一八三尺余（注・約五十五メートル）有り候。府内は眼の下にして遠くをみわたせる・・・・」。



愛宕塔：港区立港郷土資料館所蔵写真

まさに、文明開化の息吹が感じられます。建物は、煉瓦に白亜を施した十丈・五階建ての塔（高さが約30メートル）で、人々を珍しがらせたようです。最上階には、望遠鏡が備えられ、遠く高輪海岸付近で「潮干狩り」をしている姿が見えたと、様々な本に紹介されてます。

このころ、浅草にも「高塔」が建てられました。明治二十三年十一月六日付けの東京朝日新聞の記事です。「十二層　高塔　凌雲閣開業広告。十一月十日開業式。同十一日から諸君の観覧に供す。」都内には、この二つに大勢の方が訪れたようです。しかし、大正十二年九月一日の関東大震災で、崩れてしまいました。残念です。

三角点がここに



愛宕山の男坂を登り切った頂上の右側に水準地を計測する「三角点」が設置してあります。

回りをキョロキョロしないと見過ごしてしまいます。港区内には、たくさんの三角点がおかれておりますが、その一つです。是非、探してください。

千日詣・ほうずき市

夏の風物詩であります「千日詣・ほうずき市」夏越の祓としてよく知られております。6月は、一年の半分。これから残り半分を無病で過ごせるようにお願いするのです。ここの「ほうずき」の実はまだ青いのが特色。ほうずきは、薬として利用していたようです。健康を祈り、ほうずきを買い求めて帰るのが、昔からの行事でした。

NHK放送博物館

大正十四年七月から、本放送が開始されました。「J・O・A・K、こちらは東京放送局であります」ではじまった放送は、瞬く間に発展しました。電波は、様々な情報を伝えてくれる重要な要素となりました。いま、過去の放送のことが学べる「博物館」として大勢の方々から親しまれています。

放送開始のころの史料から、放送機器の進歩の状況がよくわかります。放送の舞台裏もよくわかります。

今回は、愛宕山を散策しました。皆様も是非、足を運んでみたらいかがでしょうか。

（文と写真・清田和美）

区内あちらこちら

埠頭公園

百年前の明治四十三年（一九一〇）白瀬南極探検隊は、極点到達一番乗りを目指して、芝浦沖から船出して行った。

その後、沿岸部は段々と埋め立てられ、芝浦沖と呼ばれていた海もやがて陸地に姿を変えることになる。その土地を専用球場にした日本最初のプロ野球チーム（日本運動協会）が誕生したのは大正十年（一九二一）のことだったが、不運にも翌々年に発生した関東大震災で活動を止めざるを得なかった。地震の二日前まで、大勢の観客を集めて試合が行われていたとか。巨人軍がスタートする昭和十一年（一九三六）より十五年も前のこと、芝浦生まれの江戸っ子プロ球団第一号だったのに惜しいことをした。

そこがかっての芝浦球場、現在の埠頭少年野球場であり、埠頭公園である。

公園には白瀬探検隊出発二十五周年を記念した立派な碑が建てられているが、まず目につくのは広場の真ん中にあるスクーナー船をかたどったスベリ台である。それを探検隊の開南丸（二〇四トン）と見たてながら「南極探検隊事蹟概要」という碑文を読んでみた。



現代とは比較にならぬ貧弱な条件でも、それを補うデッカイ肝っ玉の二十七人が挑んだ探検行の一部始終から元気を貰った。

気が付いたら背筋がピンと伸びている。

（文・武恒雄　写真・井上繁）

六三制誕生前夜

大門の交差点から富士山が見えた、と言っても六十三年以上前の事。今では、高いビルから見る事は出来ても、地上からは全く見る事は出来ませんね。

第二次大戦の終わった昭和二十年（一九四五年）八月の頃、東京の多くの場所は焼け野原となり、港区でも僅かにコンクリート作りの建物が残るだけ。そして終戦から一年程経過した昭和二十二年（一九四七年）に、それ迄六年と決められていた義務教育制度が変更され、小学校六年に加えて、中学校三年制となり、今に続く六三制の誕生が決まりました。

さて、三年制中学校の新設が決まったとは言え、校舎はありません。何処に行けば良いのでしょうか？子供乍ら将来の見えない不安と期待を持っての小学校の卒業でした。

私の入学すべき学校は芝浜中学校。現在では殆ど廃校になっている桜田、神明、竹芝と芝浦の四小学校の卒業者が芝浜中へ入学する事となりました。第二次大戦末期の昭和十九年には、小学校三年生から六年生の児童は、個人的な縁故を頼って地方へ疎開する者以外は、学校単位で地方へ疎開となり。その間、東京の大部分は空爆により、全ての家屋は焼失してしまっていましたが、ごく僅かの児童が焼け跡の生活の中で小学校を終えた所でした。昭和二十二年三月の小学校の卒業生の数は、疎開前の半分にも満たず校舎の教室も半分以上は使われずに放置されていました。

私の出身校は神明小学校、そして、神明小学校の空き教室の三分の一程を使って桜田小と神明小の出身者が入って本校とし、竹芝小と芝浦小の出身者は芝商業高校に間借りして分校とすることが決まり、漸く、新制中学校の形が見えてきました。芝浜中の本校となった神明小の教室は、戦時中、国の機関が使用していたとの事で、ガラスは割れ、廊下の板は穴だらけ、壁はススで黒ずみ、黒板も所々ハゲだらけ、しかし、新しい中学校は此処で始めるしかありません。

開校に先立ち、神明小の卒業生に集合がかかり、数人の先生と大掃除をする事になりました。物の無い時代です。自分で使う雑巾は各自持参で悪戦苦闘の数日でしたが、やっと、教室としての清掃が済んだ後、当時は講堂と称していた室内体育館に山積みとなっていた小学校用の机と椅子を教室への運び入れです。一階にあった講堂から二階と三階の教室へ人数分の机と椅子を運び入れて、どうやら、芝浜中学校の形が見えてきた頃は、四月も未となっていました。

四月二十九日、開校です。開校式を行ったはずなのですが、殆ど、記憶にありません。今にして思うと、開校前の準備作業の印象が強すぎて、開校式の記憶が消えてしまったのかも知れません。

この様に、六十年以上前に慌ただしく誕生した芝浜中も、その後は自前の校舎を札の辻の地に持って移転した事に加え、学区域の変更が重なり、五十年余の歴史の後、廃校となってしまいました。

第二次大戦の敗戦による新生日本を代表する新しい学制の誕生は、その後の日本の復興と発展の基となる一ページであったかも知れません。芝浜中学校廃校の後に誕生した三田中学校の新校舎の屋上からも富士山を見ることが出来るとのこと。大門交差点から見えた富士山にも増して、清々しい富士山であると信じています。

（山川　眞）

学校訪問・昔の遊び

今年お正月を迎えると間もなくして、子どもたちと一緒に昔からある遊びをして頂きたいと、区内の芝小学校からお話がありました。

二月十九日、その芝小学校へと出向きました。一年生の可愛いエスコートで体育館へ。元気いっぱいの生徒さんが、私達を迎えてくださいました。ベーゴマ、お手玉、羽子板、だるま落し、けん玉、紙飛行機、折り紙、それぞれ、やってみたい遊びのグループに分かれました。

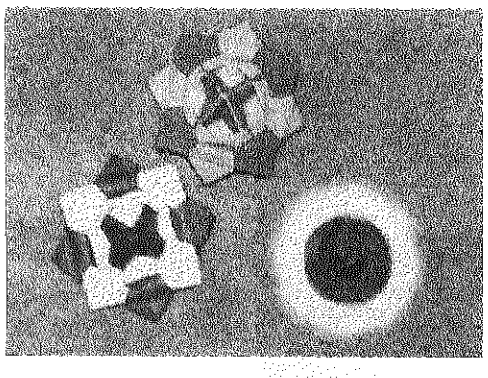
私は折り紙のグループを受け持ちました。家でやっている生徒さんや、初めての生徒さん、もみじのような可愛い手で好きな色紙を選び、「折り鶴」「風船」「こま」などを折り始めました。

なかなか折れない生徒さん、上手に早く折れる生徒さんと指先の仕事は色々です。指先は脳につながり、頭の回転に良いといわれています。子どもたちと一緒に折っておりますと、いつしか私達も夢中になってしまいます。

難しい「こま」を折りあげた時、一人の男の子が、ぼくの「こま」は「ＵＦＯ」だと叫び、空中高く上手に飛ばしました。子どもの新しい発想で、「こま」は空中に輪を描き飛んだのです。「こま」は床の上で回すものとの固定観念だけでなく、空中に飛ばすことで、より楽しいものとなりました。

短い時間でしたが、昔の遊びの中から、新しい芽がたくさん伸びてくださることに期待し、素敵な機会を体験させて頂きました。

（中嶋房子）



私たち「語り部」は区内の小学校からの依頼に応じて、戦前から戦中にかけての子どもの頃の暮らしや遊びについて、お話をしたり実地に体験して貰う活動を行っております。ご希望がありましたら下記へご連絡ください。

［附記］おもて面トップの記事は「愛宕山」、編集担当の私は昭和七年にそのすぐ近くで生まれました。

通学した小学校は。現在御成門中になっている場所にあった愛宕小。校歌は愛宕山の桜を歌うことに始まる。

ここの桜は上野の山や飛鳥山に木の本数では遥かに劣るものの満開ともなればそれなりに見事でした。戦前では、東京の名所の一つとして、当時は遊覧バスと呼んでいた今で云う観光バスが、桜の時期だけでなく毎日来ておりました。女段を上がりきると真向かいにあった茶店は、お客も多く繁盛しておりました。

子どもの頃の懐かしい記憶として最大のものが、年の暮の羽子板市。愛宕下通りは車の交通を遮断し、両側の歩道沿いだけでなく車道中央にも背中合わせに露店が並ぶ。親からいつもとは違ってまとまったお小遣いを貰い、と云っても、今の時代に換算すれば千円か二千円程度。でもそれを手に握りしめて何を買おうか品定めしながら、立ち並ぶ露店を見て歩くことの楽しかったこと。端から端まで何回も何回も往復したのでした。

（井）

係より

この夏の暑さの厳しかったこと、読者の方々には無事にお過ごしすることができましたでしょうか。

第十三号をお届します。ここに掲載の文章を目にされ、ご意見なりご感想なりをお寄せ頂けるようであれば幸いです。

「語り部」の学習会を生涯学習センター二階の「さくらだ記念室」で毎月、第二・第四水曜日の午後二時から開催しております。生まれ育った港区の話をお聞かせ下さい。関心ある方々の参加をお待ちしております。

問い合わせ　０３・３４３１・１６０６
発　行　平成二十二年十月一日
（公財）港区スポーツふれあい文化健康財団